論文

ハンガリーにおける日本人論

～19 世紀後半から第二次世界大戦までに出版された書籍を読み解く～

梅　村　裕　子
エトヴェシュ大学人文学部日本学科

要　旨

冷戦が終結して 30 年が経ったが東欧のハンガリーは未だ日本にとり馴染みの薄い国である。一方、日本・ハンガリー関係史を繙くと戦前には意外にも密接な交流があった。元々東方から民族移動してきたハンガリーでは日本に対する親近感があり関心も高かった。今回は 19 世紀末の両国関係黎明期から第二次世界大戦までに出版された日本に関する書物を 18 冊選んで紹介と分析を試みる。日本では知られざる作品を通して特に日本人論に光を当てる。どんな日本人像が書かれ、ハンガリー人は何に関心を持ち誰と交流したのだろうか。なお文末に書誌情報を加える。

キーワード： 日本・ハンガリー関係、オーストリア・ハンガリー君主国、ヴァイ・ペーテル、ツラン主義、文化交流

1. はじめに

世界のグローバル化が叫ばれてから月日も経ち、昨今の感染症流行で旅行が制限されていたとはいえ、現在地球のあらゆる国への行き来は自由かつ簡便になり多くの人が気軽に遠い国へも出かけていく。それでもまだ日本人にとって馴染みの薄い国はたくさんあり、ハンガリーもそのひとつではないだろうか。冷戦崩壊後、東欧との往来も一気に加速して今や知られざる国ではないけれども、両国の交流史になると研究者も限られており、日本では未知の分野とも言える。

ハンガリーは欧州の中でも民族的には周辺諸国と違い、アジアから大移動してきた東方からのルーツを持つという事情もあって日本には歴史的に親近感を持っている。日本が開国して間もなく西側と結んだ不平等条約の最後がオーストリア・ハンガリー君主国（以下墺洪君主国と略す）であり（1869 年）ハンガリーも列強の一部として日本との外交関係を開いた。

同国では日本についての高い関心が既にあり、交流が始まるや早い時期に調査団や探検隊が来日している。その後も聖職者やコレクター、船医らによる個人旅行も盛んで、彼らは帰国後日本についての記録を残した。筆者は日本・ハンガリー関係史を研究しているが、両国交流史の節目である周年記念の折にはハンガリーで出版された日本関係の書籍を紹介、展示する機会があった[(1)]。今回は国際交流基金の日本研究フェローに採用されて東京に長期滞在する機会を得たとこ

ろ、城西大学では日本・ハンガリー交流史の特徴について講演する機会をいただいた。その際の質疑応答などもふまえ、日本では知られていない、19世紀末から20世紀前半のハンガリーにおける日本についての書籍を集めて選択し、特に日本人の特徴を描いたところに焦点を当てて内容の分析を試みる。どのような日本人像が描かれただろうか。そしてハンガリー人は何に関心を寄せただろうか。

ハンガリーは冷戦時代に社会主義陣営に組み込まれて長い間日本にとっては文字通り遠い国であった。モナルヒア時代の歴史についてもウィーンからの情報は比較的多くあっても、言葉も異なるハンガリーで出版されたものはまだ知られていないのが現状である。この機会にまずは書籍の紹介とテーマに絞って分析・考察を試み今後のより広い研究への端緒にもなればと考える。またその際の参考として本稿の末に書誌情報、内容の概要を添付する。ハンガリー人の名前は現地表記に従い姓・名の順とした。

2. 日本・ハンガリー関係の歴史的背景

日本とハンガリー間の交流は前述したように明治に入って間もない時期に締結した1869年の修好条約によって始まった。実際の往来はこの外交関係樹立がきっかけになるが、欧州には既に江戸時代以前から日本へ行ったキリスト教宣教師達や出島へ行き来したオランダとの通商を経て日本の情報が多くあり、それらは様々な形でハンガリーへも持ち込まれていた。つまりハンガリーでは日本に関する相当な情報が流通していて国の様子はかなり知られていたというのが実情である。

日本・ハンガリー関係史の研究はハンガリーにおいても比較的新しい領域である。というのも冷戦時代、日本関係の書籍などは敵対する陣営のものとして図書館でも閲覧禁止の対象であり、研究といっても制限が大きかった。1989年の体制転換と共にそういった状況は改善されて書物も史料も自由に手に取ることができるようになった。この30年で交流史の研究もかなり進んだ。この数年、図書館司書のブダ・アティッラ氏によって、実際の人的交流が始まる以前にハンガリーで出版された日本関係の記事を集めた史料集が刊行されたが、それによると既に18世紀から非常に多くの日本情報が日常的に新聞などで紹介されていた様子が判る[(2)]。またもう一人やはり司書であるコース・イシュトヴァーン氏は主に舞台芸術を中心とした古い時代の日本情報を集めて主にネット上で発信しているが、それにも時に驚くほど詳細な日本の情報が掲載されている[(3)]。このような訳で、修好条約が締結された時、ハンガリーにおいては日本について多くの情報があり、日本へ旅する人達は明確な旅の目的を持ち、事前準備を整えて日本へ入国した人が多かったと言えるだろう。

今回収集した書籍は19世紀末から第二次大戦までの時期に出版されたものだが、半世紀に及ぶ時代の流れで国や社会の情勢も変化している。交流の黎明期を経て20世紀初頭には日露大戦が勃発し、日本の勝利はロシアと歴史上も争いの多かったハンガリーでは歓迎され、いよいよ大

国として認識される。文化的にも豊かだったこの時期は訪日するハンガリー人も増え、本論で扱う書籍が次々に刊行された。

その後、第一次世界大戦で墺洪君主国は解体され、ハンガリーはじつに固有領土の三分の二を周辺国へ割譲されるという憂き目に遭った。この事も理由のひとつで、その後ハンガリーでは自分達に酷い「仕打ち」をした西側諸国よりも自民族がその昔移動してきた東方世界に何か拠り所を見つけようとする運動や考え方が広まりつつあった。20 世紀初頭に現れたツラン主義運動に基づく団体がハンガリーでも設立され[(4)]、社会的にも認知されていく。その中で、日本も近しい民族とみなされていたので、これも日本への親近感や関心を高める土台になっていた。ツラン主義は 20 世紀初頭のハンガリーで思想、文学、美術、建築など様々な領域に大きな影響を与えていた。一方、日本においてもこういったハンガリーでの対日観が一部で紹介されており、ハンガリーを知る人たちの間では広まっていたようだ。例えば徳富蘇峰が『国民之友』にそのような記事を書いていたし[(5)]、第一次世界大戦の戦後処理として新しい国境線画定のため、委員会に戦勝国として参加した日本の武官、安藤利吉が本省へ送った報告書でもお互いの関係を「親戚民族」などと目を引く表現をしている[(6)]。

戦間期の両国関係であるが、第一次大戦後すぐに日本との外交関係は復活し、領土縮小という悲劇に見舞われたものの独立した王国としてハンガリーは再出発した。日本公使館はまだブダペストになく、ウィーンの公使館がハンガリーも管轄していた。時代は進み、人的交流も徐々に増えてくる。第一次大戦中にシベリアで戦争捕虜となったハンガリー人と干渉戦争で出兵していた日本軍との間で出会いがあり、それが発展して 1924 年にはブダペストでハンガリー日本協会という友好団体が設立されたりしている。こうして日本への関心はこれ以後も続き、1930 年代には防共協定や枢軸同盟へハンガリーが参加するという政治的結びつきへと発展していった。

日本へ旅行し、書籍出版するという点から見ると、第一次大戦後は領土縮小で国力が著しく低下したため財政難もあって費用のかかる旅行も減少していたらしく、旅行記の出版も一時中断している。1930 年代に入ってまた日本関係書が刊行されると時代の影響も感じられそれまでとは傾向の違う出版が目立ってくる。国の全貌を書くよりはより個人的な関心を中心とした交流を記述したものや、自分の専門領域に特化した書籍などが増えてきた。戦争へと進んでいく時期や戦時下ではやはり戦争や国防をテーマにした書籍も出版された。

一方昨今の日本においては明治時代に西側諸国で数多く出版された日本関係書物について既に相当数が紹介され翻訳でも読むことができる。近年の出版を見ても黒船でやって来たアメリカの『ペリー提督日本遠征記』やアーネスト・サトウの『一外交官の観た明治維新』、エミール・ギメの『明治日本散策』等当時の日本を記した大著の翻訳が出版されよく知られている。ハンガリーで出たものでは墺洪君主国時代に出たクライトナーによる『東洋紀行』が東洋文庫でドイツ語版から翻訳されているが、それ以外ではほとんど紹介されていない。

3. 選択した書籍

以下に今回選択した書籍を列挙する。

- クライトナー・グスターフ『セーチェーニ伯爵の東洋紀行』1882年
- ブローディ・シャーンドル編『日本、日出ずる帝国』1904年
- セギ・エルネー『日本――その歴史、国土、民俗』1905年
- ヴァイ・ペーテル『東洋の皇帝と帝国』1906年
- バラートシ・バログ・ベネデク『大日本・日本紀行』1906年
- ガーシュパール・フェレンツ『世界一周の旅』第五巻1908年
- ヴァイ・ペーテル『東洋の芸術と美的趣向』1908年
- プレーレ・ヴィルモシュ『日出ずる東より』1910年
- ボゾーキ・デジェー『東洋で過ごした二年間・日本』1911年
- チゲ・ヴァルガ・アンタル『日本と日本人』1914年
- ヴァイ・ペーテル『東半球にて』1918年
- メーチ・アラヨシュ『知られざる日本』1936年
- ライタ・エドガール『日本・昨日、今日、明日』1936年
- ジゴヴィッチ・ベーラ『キリスト教の観点から見た日本』1937年
- フェルヴィンツィ・タカーチ・ゾルターン『極東におけるブッダの足跡を行く』Ⅰ、Ⅱ、1938年
- メゼイ・イシュトヴァーン『本当の日本』1939年
- ケペ・ヴィクトル『日本のふたつの顔』1943年
- ジュッファ・シャーンドル『ニッポン』1943年

集めた書籍を概観してみると、多岐に渡る本の数々である。特に第一次大戦前の書籍は、西欧列強の一地域だったハンガリーという国の豊かさを反映している。旅行者達はお金のかかる旅をしていた様子であるし、質の良い写真も多く撮っている。いわゆる大著という部類に入る分厚いものが多く、詳細な記録であり、紙や印刷、豪華な装丁、製本にも豊かな文化事情が現れている。第一次大戦が起こり、ハンガリーは史上も稀な悲劇的戦後処理を被っての再出発になった。この歴史的背景を反映し、日本関係書籍の出版はしばらく途絶えてしまい、同種の出版が再び盛んになるのは1930年代になってからだ。この時期にはまた別の意味で時代を感じさせる、それまでになかったテーマ、例えば両国関係の交流を描いたものや、戦争が近づくにつれ、アジア地域の軍事的戦略を解説したものが出てくる。書籍の装丁は徐々に簡素となり、戦争中には紙の質などにも困難な状況が見られる。

著者も様々であるが、職業で見ると学者が4人、著述業・ジャーナリストが3人、聖職者が3

人、法律関係者が2人、船医が2人、行政関係者が1人、軍の将校が1人とこちらも多岐に渡っている。また訪日経験のある著者も12人に上っている。実際の体験に基づく著作が14冊、文献を駆使したものが3冊、複数著者の記事を集めたものが1冊という分類もできる。出版場所はボゾーキのナジヴァーラド（現ルーマニア領オラデア）を除いてすべてブダペストであった。

4. ハンガリー人の描いた日本

4-1　日本人の特徴

ここからは個々の書籍に記された日本人の特徴について描かれた記述を観ていく。まずは書籍として最も早い時期に出版された『セーチェーニ伯爵の東洋紀行』であるが、題名に出るセーチェーニ伯とはハンガリーにおいて高名な貴族の家柄の一員で、この旅を財政的に支援し、オーガナイズしたセーチェーニ・ベーラである。ちなみに彼の父、イシュトヴァーンは19世紀半ばに国を大きな改革へと導いた政治家として活躍し、現在でもハンガリー史上最も尊敬を集める人物である。ベーラ自身は地質学者として名をなし、日本旅行の目的のひとつは研究上の素材を収集することでもあった。ベーラは帰国後日本から持ち帰った地質学の資料をもとに分厚い研究書を出版している。

本書の著者グスタフ・クライトナーは墺洪軍に所属する官吏で、地形学の専門家としてセーチェーニの探検隊に加わった。本書の内容にはその専門性が生かされている。その後アジア地域の外交官に志願して横浜領事に任命され、1892年より墺洪君主国横浜総領事となった。日本でその生涯を終え、横浜の外人墓地に眠っている。また本書は唯一日本で翻訳が出版されている。二重君主国の特徴を反映して、本書もドイツ語とハンガリー語とふたつの版が出版された(7)。

まずはクライトナーが日本人の特質、特徴を捉えてそれを面白く表現している。例えば、日本人はあまりにも賭博好きで、ささいな事でもくじで決めると面白がり、人力車を雇ったら誰がどの車を引くかもくじで決めたと記している。また中国やインドと較べて「日本人はとらえやすい国であり、人々も単純で自然であるので、理解するのが容易である。街道の模様、茶屋、寺およびその居住者と参拝者を素描すれば、この屈託のない雑談や快活な笑い声は十分伝わるだろう」と書き、中国やインドではそうはいかないと感じている。そして「旅行者は誰も日本の国土と国民の虜になって日本から去る」と綴った(8)。

知られた作家のブローディが編集し、当時ハンガリーで読まれていた諸言語の記事などを集めて出版した書籍では、彼が関心を寄せた日本人の特徴をうまく切り取っている。しばしば書かれたステレオタイプをなぞるのではなくリアリティーを保っている。

例えば日本人の微笑みについて「彼らの微笑みは喜びを表現するのではなく、その文化に深く根を下ろした他人への愛想の良さであり、それは習練された感情のコントロールを表している。例えばお客に対する微笑みは、我々の握手のようなものだ」と理にかなった説明をしている。当時の文献を駆使して書かれたにしてはその描写は生き生きとしていて、面白い読み物に仕上がっ

ている。日本人の国民性について述べたところでは、それを一般化するのは難しいとしながらも、各国の研究者達の意見の一致するところ「日本人は基本的に良心的で、正直な人が多く、勤勉、明るく親切で勇気ある人達」だとしている。アメリカ人のパーシヴァル・ローウェルが描いた「かなり見栄っ張りだが好奇心に富み、新しいもの好き。考え方は楽観的でお金もうけよりは楽しむことが好き」といった日本人論を紹介している。一方、死の捉え方も西洋と違い、死への恐れという感覚も強くないようなので、案外取るに足らない事で切腹してしまう、と解説している(9)。

墺洪軍の船医で世界一周旅行をしたガーシュパール・フェレンツは、日本人が感情を表に出さない様子を珍しいと感じ、そのあたりの説明をしている。「もう子供の時から自分の気持ちを表に出さないように躾けられている。怒り、痛み、憤慨、イライラなどの気持ちをどんな時でも直接表さない事、最も耐え難い瞬間でも笑っていなさい、と教えられる」と述べ、軍人や病人が死に目にも騒ぐことなく別れる様子を例えに解説している。続いて日本人女性について、子供の時は両親に従い、結婚すると夫や義母に仕え、そして母親として子育てに勤しむ、つまりいつも誰かのために働くことが使命になっているようで、そのような人生が円満に進むよう、幼い時から自分を抑える事、慎み深さ、穏やかさ、諦めなどを教えられる、と解説した(10)。

もちろん中にはステレオタイプな記述も散見されるが、それぞれの著者がそれらにコメントを加えていて、そのまま鵜呑みにしているというのではないことがわかる。例えば法律家だったチゲ・ヴァルガ・アンタルの著書で最も興味深いのは国民性についての記述で、ここではラフカディオ・ハーン、ケンペル、チェンバレンらの著作を引用しつつ、欧州の知識人から見た固定観念と批判的意見、つまり日本人は想像力に欠ける、抽象的な事をあまり理解しない、受け入れるばかりで自分達で創造できない、などを紹介している。一方、何人かの意見で、日本人を知れば知るほどそんなに単純な事でなく、一言で国民性を表現するなどはおこがましいことだという意見に著者ヴァルガは同意しているようだ。日本はまだ世界に広まる新しい普遍的価値を提示してはいないかも知れないが、この短期間で西欧文化をここまで自分のものにし、それを自分の国に相応しく日本化しているのはそれだけ能力があるという事だろうとも述べている。子供のようにナイーブな面を持ち、気性は明るく、とにかく理論より実際面を重んじる……などは多分現在でも外国人の見方の一面を代弁しているのではないだろうか(11)。

4-2 日常生活や習慣の説明、民俗学的アプローチ

日本人の性格や特徴の描写に続き興味深いのは、日常生活や習慣についての説明書きである。背景を説明したものや欧州の目から観て不思議に思える事柄を書いていて、意外な面を再発見させられる。

まずは、高校の校長をしながら民俗学者としても名をなしたバログ・ベネデクの大日本という3巻本の一冊目である。風俗や習慣には特に興味を持っていたようで描写も的を射ている。例えば風呂について、著者は日本の風呂はヨーロッパと異なった意味があり、夏は熱い風呂から出て

さっぱりする役目があり、冬は文字通り体を温めてそのまま床に入る、と認識している。笑いを誘う場面もある。「熱い湯にだいたい 10-20 分も浸かり、赤く茹ったからだで風呂から出てくる。一度は湯の熱さを知らずに湯船に入って、あわてて飛び出すはめになった。ちょうど戸を開けた宿の女中に見られて笑われてしまう。その時、娘さんの前に裸で立ち尽くすはめになった様はちょっとどう説明していいかわからない状況だった」また日本人の国民性について、初対面時の丁寧さ、愛想の良さは表面的なもので、本当はかなり内向的で排他的、外国人を疑心の目で見ていると著者は感じている。日本人の疑心というのは、三百年近い徳川時代の密告制度が作り出したものではないかと推測し、「しかし一旦信用を得ると、もう限りなく親しくなって、同情を表してくれるようになる」とその体験を書いている[(12)]。

このバログの著書と肩を並べる大著で、特に多くの写真を掲載していて現在でも歴史的価値のある著作を発表したのが船医としてアジア地域を 2 年間旅したボゾーキ・デジェーである。自分の旅行の体験がほぼそのまま詳しく記されていて、様々な生活上の場面を切り取って活写している。

例えば汽車で移動した時の体験をこう綴る。「読み物を持たないで汽車に乗る日本人はいない。座席の端に場所を取ると、手持ちの敷物を敷いてそこに靴を脱いで座っている。自分の家にいる時のようにくつろいだ感じだ。きれいな箱につめたお弁当を広げる人が多く、仲むつまじい夫婦が一緒にそれを分け合って食す様子は見ていても微笑ましい……」と書いている。また全体を通じて何度か記述されるのが、生活全般に行き渡っている清潔さと、日本人の花に対する特別な思い入れである。これは印象が強かったとみえて、繰り返して描写している。曰くどんな貧しい家庭でも家は清潔で、屋内を汚いと感じる事は皆無である。皆よく歯を磨いているし、石鹸の消費も相当な量であると述べ、当時の歯ブラシを写真に撮っている。また著者は自国ハンガリー製の石鹸をも発見した。「日本人のすまいでは、長くすそを引きずる黒いドレスで家中を歩いてもほこりが布に付くこともないだろう」とか、道にもほとんどゴミが見当たらない、というような事を驚きの目で見て細かく取り上げている。もうひとつは花への想いで、桜の花見にとどまらず、菊の花や藤の花、盆栽、庭に咲く花々がいかに日常生活と結びつき、日本人はそれを愛でて瞑想し、祭りなど伝統行事でも重要な役目を果たしているかを記述している。このあたりは多分、現代へもそのまま受け継がれている面であろう[(13)]。

西欧の人たちの目に映った日本の現象を著者らは様々な見方で説明を加えているが、中でも笑いを誘ったのは鈴虫についての描写である。多くの家で夏に鈴虫が飼われていて、日本人はそれを番犬ならぬ家の番をする虫と認識していると書いている。つまりずっと鳴き続ける鈴虫は、誰か部外者が入ってくると鳴き止むので、家人の注意を喚起するというのである。これを書いた著者のメーチは売れっ子ジャーナリストであり、1930 年代に二年に渡る日本滞在で特派員として記事を書くとともに書籍も出版した。自身が体験した日本人の特徴としては、想像や創造よりも現実的、実質的な事に優れており、これが長所でもあり、同時に欠点でもあるとする。加えて好奇心旺盛、勤勉、義務感が強い、一方で傷つきやすいところがあり、懐疑的な面もあると観察している[(14)]。

東洋学者・言語学者としても名の通っていたプレーレ・ヴィルモシュは日本人の美的感覚を描き、次のように記している。「桜の季節になるともう昔からの習慣で皆揃って見に出かけ、吉野地方はたくさんの人でごった返す。花見、月見、雪見などは我が国で知られない習慣である。（中略）心からの深い純真な美的感覚の源泉といえるだろう」ハンガリー語の表現も的を射ていて本質をよく表した説明になっている[15]。

宗教についての記述では次第に時代の影響が表れてくる。例えば美術史の専門家として日本美術を紹介したタカーチは神道についての説明と感想を次のように綴っている。時代の雰囲気を表していて興味深い。日本文化は多くの事柄を中国や西洋から取り入れているが、古代から続く信仰が絶えず息づいている、と次のように強調している。「この国民的宗教ともいうべき考え方は、何か教義とか知恵とかではなく、無条件に信じられている道徳的な教えであり、それは全く楽観的で、ほとんど議論するのも無駄なほどである。このような信心の強さはむしろうらやましいくらいだ」[16]

4-3　名義司教、ヴァイ伯爵による日本の描写

今回選択した書籍の内3冊を書いたのがヴァイ・ペーテル（1864-1948）で、特に一章設けることとする。彼は伯爵家に生まれながらカトリックの聖職者となり、その後教皇庁書記長に、後に名義司教に任命され、広くアジアやアメリカへ旅している。高い身分と教養を兼ね備え、当代きってのアジア通であった。ヴァイは名門家の子息として早くから当時最高の教育を受け、16歳の時ウィーンの宮廷へ召され、オーストリア皇帝兼ハンガリー国王フランツ・ヨゼフの妃、かの高名なエリザベトの元で仕えている。その後スイスなどで学んだ後、聖職者の道を志してローマのグレゴリアン大学で神学を修めた。その才能に法王レオ13世も注目し在学中にモンセニョールの称号を与えている。1898年司祭に叙階と同時に教皇庁書記長の資格が与えられた。つまり決まった教会での司祭ではなく、法王の特使として世界を回る伝道師としての外交的活動が主な仕事になった。世界中を旅してその地域の状況を視察し、また移住者達のケアにも当たった。この過程で日本へ1902-03年、1907年、19913-14年と3度来訪している。特に美術には造詣が深く、二度目の来日ではブダペスト王立美術館からの依頼で美術収集をしてそれらを本国へ送った。浮世絵や根付を中心とした優れた作品を買い付け、現在もハンガリーのホップ東洋美術館の中心的コレクションとなっている[17]。このように聖職者として、東洋学者・著述家として華々しい活躍をしたヴァイであったが、60歳を機に修道僧としての静かな生活に活動を切り替え、1948年に亡くなるまでアッシジの修道院で過ごした[18]。

ヴァイは日本滞在中多くの作品や建物と直に接していたので美的価値やその背景についての描写は特に注目に値すると言える。日本人の美的感覚について住居を例に次のように記している。「和室のインテリアは世界中で最も簡素で洗練されていると言えるだろうが、それは彼らの美的感覚が作り出したものである。使用素材が問題ではなく、背景にある理念が重要である。四方を囲む白い壁、床、天井そのものは高価なものではないが、それらが作り出す雰囲気と効果は住む

人に大きな影響を与える。整然とした秩序と清潔さは住居の価値であり、この和室からこそかもし出される。日々の活動に欠かせない住居は光にあふれ、明るく清潔で、何よりも健康的で親しみの持てる空間である」カトリック教会の伝道師、教皇の特使として文字通り世界中、五大陸を駆け回ったヴァイだからこそ「世界で最も……」という表現がリアリティーをもって響くのである[19]。

訪日も3度目となり、この20年間の変化を注視し、発展ぶりに目を見張りながら伝統が急速に無くなっていく様を惜しんでもいる。京都が都市開発で新しくなり、昔の街や家並みの失われる姿を嘆いている。これが明治時代の話であるから、今の京都をヴァイが見たら何と思うだろうか。

教皇庁の特使という高い身分によって出会った日本の政治家達や一般の人々の生活、また関心の中心にあった美術品などを通して見た日本社会の特徴や国民性を広く、また本質的に捉えている。中でも日本人の特性について述べている箇所は普遍性があり、現代の目で読んでも面白く、変わらぬ日本の姿があぶり出されている。例えば秀でた面として「規律というのは日本における最も強力な武器であろう。（中略）国民挙げて公のために保つ規律や秩序というのはどんな新しい武器、鋭い刀にも勝るものだ。この己を律する事の実践がひいては国の安泰と国民の満足を保障する手立てになっている」また比較的甘やかされて育つ子供達に触れ、それでも彼らが人前で泣かない事に目を向け「目立って特徴的なのは、心の中の感情を表に出さないよう教えられていることだ。そのため我々西洋の人間にとって理解できないのは別れる時の冷淡ともいえる光景である。兵隊を送り出すのに歓喜の声が上がり、葬式でも習慣的な笑みが見られる。この仮面とも見える顔の表情は回りの世界で何が起ころうとも不変を保っている」と日本人が感情を押さえる様子を描いている。

戦後、欧米からワークホリックと揶揄された日本人であるが、ヴァイもそういった傾向に気が付いていて、その日常を次のように描写する。「日本人は行動する人々である。常に何かせずにはいられない。起きる、行き来する、動く、そして疲れる……心も体もそういう風に準備されている。（中略）きわめて忍耐強い」世界で有名になった人力車に触れ、どれほど困難な仕事か、彼らの働き振りを驚異の目で見ている。そして日本人は「何かを営んだり成し遂げたりする事に喜びを見出し、何か困難に挑むことに意気揚々とする。特に必要がなければ趣味のごとく疲れることに取り組む……」と動きまわる人々の様子を捉えた。「この世の人生は彼らにとって実際に自分の手で成し遂げた事柄だけを意味しているようだ。行動する、仕事をする、そして疲れる、しかし一歩進んでそのすべてがなぜか、というような事は問わない。営みにおいてその時々の小さな目的を達することができればそれで満足しているようだ」と観察しているが、このあたりは人生の目的に明確な哲学を持つキリスト教聖職者としての見方が感じられる。当代きっての日本通の描写は様々な観点から日本を活写していて、きわめて示唆に富む一冊である[20]。

4–4　人物交流、出会い

書籍を並べて読んでいくと著者達が様々な出会いをしている。特に外交上も特筆すべき出会い

はやはりヴァイ伯と明治天皇の謁見であり、それを書籍にも記録していた。欧州における身分の高い聖職者がどんな印象を持ったのか、話題になったのはどんなテーマか、時代の証人という意味でも貴重な記録であろう。彼はまずそのすまいの地味さ、簡素さに言及する。内部の装飾に日本的なものが表現されていない、と軽い失望を覚えている。これならむしろ桂離宮にある和の雰囲気を演出した方がよかったのに、とも述べる。明治天皇はヴァイに敬意を表してモナルヒアから贈られた聖イシュトヴァーン勲章（ダイヤモンド星型）をつけて現れた。明治天皇はヴァイに様々な質問を投げかけ、日本で体験した事、フランツ・ヨゼフ国王の消息について、シベリア鉄道の旅行はどんな風だったか、などを次々と尋ねている。旅の様子を細かく聞き「このような様々に違う国を通ってここまで来るというのは欧州の人にとってさぞ面白い事でしょうね」と言い、続けて「商業がどれくらい発展したか是非大阪を観ていって下さい。来月私も大阪へ行くのでちょうど滞在中でしたらまだお会いできるかも知れません」と述べている。会談の後ヴァイは、陛下のような身分の人は普通に人との関係を持つことは出来ず、生まれてこの方、何か公に用のある人と会うだけのような日常であるから世界のいろいろなことを知るというのはさぞ難しいだろう、と感想を述べている。

そして暇を告げている時に、皇后陛下もお会いになるという連絡が来て、場所を移すことになる。ヴァイは皇后陛下の印象について、気品があって優しい感じにあふれているが、どこかに悲しみが漂っている、と綴っている。皇后の話題は慈善事業、病院、教育、貧しい人達への施しなど福祉に関することが主で、カトリックの司教として欧州における福祉活動をよく知るヴァイの見方や意見に関心があったようだ[21]。また伊藤博文や大隈重信といった史上の人物との出会いもあったようで短い印象などを読むことができる。史上の人物としては船医のボゾーキもハンガリーの公使館で日露戦争の英雄、東郷平八郎と会っている。

キリスト教の聖職者であり、墺洪君主国東京駐箚大使子息の教育係として滞在したセギによる著作には、神父ならではのエピソードが出て来て印象的だ。ある日母親に抱かれた重病の子供に日光で出会った。母親が気付かぬ形で密かに臨終の秘蹟を与え、この行為によって赤ん坊をカトリック信者としてあの世へ送り出し「このかわいそうな赤ん坊はこれで天国への門が開いた訳だ。突然の恵みをどんなにか驚くだろう」と記している。また本人が日本に対して理解できない思いを抱いた時には「こうした文化的な溝を埋めるのはやはりキリスト教が日本で広まるしかないだろう」という結論に達しているあたりは、立場上当然であったかも知れない。人口増加に比して資源が乏しいから、発展のために植民地が必要であろうと評しているのも注目される[22]。

日本・ハンガリー関係史という観点から興味深いのは、紀行文や実際の滞在記であるが、著者と両国交流に関わった関係者との出会いも所々で読むことができる。美術史を専門にしているタカーチ・ゾルターンは1920年代にハンガリーに長期滞在して名を知られるようになった今岡十一郎や、日ハ交流に尽力した鍋島直和、ツラン主義を日本で広めようとしていた角岡知良といったハンガリー関係者達との交流について書いている。日本とハンガリーは1938年に文化協定を結ぶことになるが、戦前の短い時期、両国が密接な関係を築いた時期ならではの出会いで

あったろう[23]。タカーチに続いて1930年代に来日して本を書いたメゼイの作品では多くの人物が本名で登場するが、そこでは知られざる両国間の歴史的なエピソードが披露されている。文化交流に財政面の支援をした三井高陽男爵や、ハンガリー語を解した粟飯原晋の話、世界で初のチベット語辞書を編纂したハンガリー人の言語学者ケーレシ・チョマ・シャーンドルが日本の仏教界で高く評価されている様子など、関係史について貴重な情報を提供している[24]。

4-5　扱われたテーマの変遷

今回は交流の初期から第二次大戦までを見ているが、時代の移り変わりと共に扱われるテーマも当然変化していった。最初の頃は初めてみる日本の様子に驚いたり奇異に映っていたものを解明する段階であった。その内日本が西側世界に認められていくにしたがって社会も欧米化していったので、今度はそれを評価したり批判したりする記述も増えてくる。第一次大戦後は立場も国の様相も互いに変化し、今度は国を増強してアジアに支配を広げようとする日本の描写へ重点が移っていく。

1930年代から戦争にかけてはそういった日本の外交姿勢や立場に言及したものが目立ってくる。メーチの書籍では章立てに次のような言葉が使われた。「永遠の日本」「勢力拡大する日本」「進撃する日本」「大胆不敵の日本」などと少々挑発的な文言が踊っている。特に題三章では具体的になぜ勢力拡大せねばならないか、を国際情勢や経済活動と合わせて分析している。鉄、石炭と輸送についての国際競争、機械化される手工業、日本式ダンピングの現状、労働状況、繊維工業における競争、輸送船団の発達、というのが具体的な内容だ。続いて第四章は日本の軍隊、軍備増強、海軍の組織、日本のこれから、新しい勢力圏のバランス、アジアからの危険要素、死活問題、といった小見出しで満州や日本が権益を持った地域についてその勢力拡大を見据えた分析記事が書かれ、戦争への道を進みつつある時代背景が影響している。1936年の作品だが1942年にも再版が発行されていた。アジア地域へ日本が支配を拡大することの正当性を強調している。

ジュッファの作品「日本」では副題に「ニッポンと極東の対立における歴史的背景」とあり、時節の対立を解き明かすべく、主に中国大陸の歴史を詳しく述べたあと、日本との関係を解説している。著者もメゼイと同じく、第一次大戦時に日本軍管理下の収容所に抑留され、日本人と友好的な関係を築いたことが、本書執筆の動機になったと言う。最終章では日本と諸外国の外交関係を述べており、ここには著者の軍人としての認識を読む事ができる。曰く、日本は資源に乏しい国であり、大陸への拡大は必須条件であることとか、軍事戦略上も既得権益で得た地域を堅持していく必要性についてなど日本の立場を擁護するような論調も目立っている。この後、両国が結んだ文化協定に関して、その背景や条約文を紹介していて時代の影響を感じさせる内容となっている[25]。

また著者によって専門領域はそれぞれ異なり、当然それも内容に反映されている。地質学者だったケペの作品では地震や活火山などハンガリーではあまり触れることのできない事柄に関心を寄せて、視察での体験を多く記述している。霧島山の観察や、当時ちょうど噴煙を上げていた

浅間山では実際に山に登りその様子を詳細に描いている。このように活火山が緩やかな活動を続けているのにかかわらず、実際に山へ近づけるというのは稀なことだそうで、学者として貴重な体験をしたと記している。自然科学の学者に相応しく、真珠養殖などもかなり関心を引いたようで、ミキモト真珠がどうやって世界に名だたる真珠の養殖に成功したかについて詳しく紹介している[26]。

5. まとめ

18冊ほどの日本関連書籍を見てきたが、かなり詳細な日本紹介が行われていたことが分る。自らの体験記を元にしているものが多く、それらは明治から大正、昭和へと移り行く日本の様々な事柄をとらえて生き生きと描写している。西欧列強の一翼として豊かな文化が開花していた国の状況が背景にあり、著者達はお金のかかる旅をしていたようで「日本の物価が安い」という表現にもたびたび出会った。日本に関する情報はかなり豊富にあったと見受けられ、記述は詳しく、広い領域に及び、日本人として想像するようなステレオタイプに終始したものはほとんどなかった。

書籍に共通していたのは、日本人の清潔さ、すまいのきれいさである。これについてはほとんどの書籍が言及している。これに続いて多くの本が日本人の特色を表すエピソードとして挙げたのが忠臣蔵のストーリーである。これは国民のメンタリティーを説明するのに格好の話とみなした著者が多かったという事であろうが、まるで右にならったようにこぞってこれを紹介している事は多少驚きを隠せなかった。

総括的には全体として好意的な文言が並んでいたし、説明も理にかなっていて、日本人として読んでもなるほどとうなずかされる箇所が多かった。中でも別に章立てをしたヴァイ伯の著書は質量ともに抜きんでたものであろう。昨今は幕末から明治、大正にかけて外国で書かれた日本について翻訳出版することが盛んであるが、まだ日本では知られていないハンガリー人による日本の描写も今後は翻訳出版して公開する意味があるのではないかと考える。

今回は第二次大戦までを区切りとしたが分量の関係もあり書籍のすべてを網羅した訳ではなく、選択した以外にも何冊か挙げるべきものが残っている。ベルナート・ゲーザの『東アジアの旅』(1873年)やパーストル・アールパードによる『ブダペストから世界一周の旅』(1911年)、第二次大戦中に出版されたリプチェイ・マジャル・シャーンドルの『大日本』(1942年)ナジ・イワーンの『大東亜』(1943年)などだ。1929年にはハンガリーに長期滞在した今岡十一郎が『新日本』という題で日本案内書を出版した。日本人の手による初のハンガリー語書籍だが、ハンガリー人の日本人論というテーマに絞ったため今回は割愛した。しかし案内書としては内容も充実していて当時も注目された一冊であることを付け加えておく。

本論は国際交流基金の2021/2022年度日本研究フェローシップにより東京に滞在し城西大学現代政策学部の研究会で講演したことが契機となってまとめることができた。ここに感謝の意を表したい。

《注》

（1） 2009年、日本とハンガリーの外交関係樹立140周年及び外交関係再開50周年にブダペストのラート・ジェルジ博物館で両国修好年を祝うべく古い書籍と浮世絵の展示会が開かれた。

（2） Buda Attila: *Messziről felmerülő, vonzó szigetek 1., Japánról szóló magyar nyelvű ismertetések a kezdetektől 1869-ig.* 2010., 同シリーズ *2/1., Japánról szóló magyar nyelvű források 1870-től a japán-kínai háborúig.* 2012. 同 *2/2., Japánról szóló magyar nyelvű források 1896-tól az első világháború végéig.* 2014. Ráció kiadó.

（3） Koós István: https://epa.oszk.hu/03500/03508/00040/pdf/EPA03508_filmszem_2020_04.pdf, http://hdl.handle.net/10831/42789

（4） ツランとは古いペルシャ語でイランから北の平原を意味するが、ユーラシア大陸でアーリアにもセムにも属さない民族の総称としてツラン民族という言葉が使われた。広義には膠着語を話す民族にあてはめられハンガリーも日本もこれに属するとされた。ハンガリーでは20世紀初頭から広まり、学術的裏付けはなかったが社会運動として影響力を持っていた。

（5） 徳富蘇峰：『洪牙利』In.「国民乃友」1898年第369号。

（6） 安藤利吉：『「チ」洪間国境劃定委員会最終報告書』アジア歴史資料センター：JACAR B06150278200.

（7） クライトナー、G.小谷裕幸・森田明訳『東洋紀行1』1992年、平凡社。本稿においてはこの日本語訳から引用した。原著 Kreitner Gusztáv: *Gróf Széchenyi Béla keleti utazása* 1882. Révai testvérek kiadása.

（8） 前掲書日本版271、283頁。

（9） Bródy Sándor（szerk. és ford.）：*Japán ország. A felkelô nap birodalma.* 1904. Pallas Irodalmi és Nyomdai Részvénytársaság, 136, 55–56.

（10） Gáspár Ferenc: *A föld körül. V. kötet: Ázsiai térség* 1908. Singer és Wolfner kiadása, 370–373.

（11） Csige Varga Antal: *Japán és a japánok* 1914. Franklin-Társulat kiadása, 125–130.

（12） Barátosi Balogh Benedek: *Dai Nippon. I. kötet: Utirajzok* 1906. Corvin kiadása, 122–126, 210.

（13） Bozóky Dezső：*Két év Keletázsiában. II. kötet: Japán* 1911. Szerzô saját kiadása, 399–400, 46–47, 116.

（14） Mécs Alajos: *Az ismeretlen Japán* 1936. Stádium Sajtóvállalat Rt., Javított második kiadás: 1942. Pantheon Kiadás, 34–36, 11.

（15） Pröhle Vilmos: *Napkeletről* 1910, második kiadás: 1922. Franklin-Társulat, 75.

（16） Felvinczi Takács Zoltán: *Buddha útján a Távol-Keleten I–II.* 1938. Révai nyomda, 222–223.

（17） 同コレクションについては日本でも評価されていて近年日文研の調査によりカタログ集が出版された。『ホップ・フェレンツ東洋美術館所蔵日本美術品目録』1995年、国際日本文化研究センター日文研叢書6。

（18） ヴァイの活動については次に記すガーシュパール氏の研究に依る。Gáspár Annamária: „Gróf Vay Péter – Egy elfeledett ázsia-kutató és misszionárius munkássága” In. Cseh-Gáspár -Umemura: *Ukijo-e Az elillanó világ képei* 2010. Hopp Ferenc Kelet-Ázsiai Művészeti Múzeum. 82–107.（日本語訳：梅村裕子 108–123.）

（19） Vay Péter: *Kelet művészete és műízlése* 1908. Franklin-Társulat, 116.

（20） Vay Péter: *A keleti féltekén* 1918. Franklin-Társulat kiadása, 240–244. 254–255, 263.

（21） Vay Péter: *Kelet császárai és császárságai* 1906. Franklin-Társulat, 394–398, 296–297.

（22） Szeghy Ernő: *Japán. Történelmi, föld- és néprajzi vázlatok* 1905. Szent István Társulat kiadása, 56, 177.

（23） Felvinczi Takács Zoltán: *Buddha útján a Távol-Keleten I–II.* 1938. Révai nyomda, I. 220, II: 156–157.

(24) Mezey István: *Az igazi Japán* 1939. Magyar Nippon Társaság kiadása, 206–210, 102, 187.

(25) Zsuffa Sándor: *Nippon* 1943. Stádium Sajtóvállalat Rt., 86–91.

(26) Keöpe Viktor: *Japán két arca* 1943. Vörösváry Kiadóvállalat, 18–19, 134–137.

添付資料：扱った書籍の書誌情報と内容の概要

Kreitner Gusztáv: *Gróf Széchenyi Béla keleti utazása.* 1882.

1877 年から 80 年までの大旅行である。最も早い時期に出た日本紹介の書。クライトナーは墺洪君主国の官吏。アジアの旅全体を扱っていて 23 章の内、6 章から 9 章までが日本部分。長崎へ上陸し、瀬戸内海、神戸と北上し、関西を経て、中仙道と東海道を通り、富士山にも登り、東京へ到着する。道中の出来事やエピソードを交え、墓地、夜の街、見世物、宗教、芝居、鉄道、旅館、軍隊、寺社、温泉などについて記す。祇園祭に遭遇し、女性の地位について触れ、精神病院も視察した。著者は地理学者で測量の様子や硫黄泉について記し、函館でアイヌ人達と交流し民族的な特徴を描いている。

Bródy Sándor（szerk.）: *Japán ország. A felkelô nap birodalma.* 1904.

編者ブローディ（1863-1924）は作家として知られた人物。訪日経験はなく序を書き、内容は当時の英、仏、独語などの文献により複数の著者が執筆。15 章から成り一般的な事柄を紹介した。軍備、歴史、考え方、国土、国民性、文学、劇場、絵画、文化、女性、宗教、民俗など。浮世絵やイラストの価値も高い。

Szeghy Ernő: *Japán. Történelmi, föld- és néprajzi vázlatok.* 1905.

著者セギ（1872-1952）はシステルシア会派のカトリック神父。墺洪君主国の日本大使に随行し、息子の養育係として日本へ。三年滞在し、体験や知識を元に本書を記す。歴史、地理の概略に始まり、民族、子供、学校、住居、寺社、芸術、食事、宗教と迷信などを紹介。明治の日本を聖職者がどう見たかが解る。赴任での滞在であり、客観的で距離をおいた態度が伺われる。

Vay Péter: *Kelet császárai és császárságai.* 1906.

帝政のロシア、中国、韓国、日本を旅してその見聞を記した書。著者ヴァイ（1864-1948）はカトリックの聖職者で、教皇庁書記長に任命されて世界を旅した。3 度来日している。日本については後半の 60 頁ほど。章立ては「東京」「皇居の両陛下」「20 世紀の日本と中国」。内容は都市、考え方、交通、商業、大学、仕事などの日本紹介。両陛下との謁見、最終章では黄禍論、武士道、茶の湯、敵討ち、倫理観、神道、ザビエル、労働者、商い、芸術的感覚などの案内に続き日中関係が述べられている。

Barátosi Balogh Benedek: *Dai Nippon. I. Utirajzok.* 1906.

著者バログ（1870-1945）は高校教師だが東洋を旅して記録し、民俗学的資料を集め、専門家として知られる。『大日本』と題する著書は三巻本で、日本紀行、歴史、文学という構成。

ここでは紀行部分を取り上げる。三度来日している。18章の内6章から15章までが日本部分。訪れた場所についてと、そこでの見聞が記される。まず東京とそこで体験した食べ物や習慣、横浜では住居、結婚、家族、国民性、日本のハンガリー認識。関西では産業、寺社、美術、天皇、行事、吉原、音楽、舞台芸術などについて。北海道ではアイヌ人と文化、再び東京で憲法、政治、軍隊、社会変化などを解説する。全体はエッセイ風の描写である。

Gáspár Ferenc: *A föld körül. V. Ázsiai térség.* 1908.

著者ガーシュパール（1862-1923）は船医として世界一周の旅をして六巻本の大作を出した。第五巻はオーストラリアから始まり、アジア、日本と進んでいる。日本滞在は数週間で二度目の来日。本書の約150頁が日本の記述。内容はまず一般情報があり、訪問した都市とその体験を綴る。横浜、東京、富士山、日光、京都、奈良、神戸、長崎という章立てで、国民に関する記述は外見、服装、住居、生活様式、宗教を取り上げ、国の地理、気候についての概略の後、旅の体験を書いている。東京に続き鉄道、人力車、寺社、東大での体験と教育、歌舞伎等について記述した。

Vay Péter: *Kelet művészete és műízlése.* 1908.

著者二冊目の日本関係書。二回目の訪日ではブダペスト国立美術館の依頼で美術品を買い上げ、帰国後に執筆した。一般的な文化や国の発展を述べたあと、芸術の要素、住居、芸術愛好、日本人と花、生活に生きる芸術、美的価値、和の乱れ、工芸品など美術の要素や美的感性に関する内容に続き、日本の美術史を詳しく解説している。土器や埴輪に始まり、飛鳥・白鳳文化、大仏、壁画、平安時代の宮廷美術、貴族文化、国風文化、鎌倉・室町の仏像や建築、水墨画と狩野派の作品、江戸時代に入り浮世絵、陶磁器、根付などの工芸について特徴や流派、様式にも触れる。絵画、彫刻、版画、建築、工芸、鍛冶錬金等、総合的な紹介を読むことができる。解説部分は著者の体験や見聞がもとになっていて興味深い。ハンガリーで初めて出た日本美術の専門書として意義はきわめて大きい。

Pröhle Vilmos: *Napkeletrôl.* 1910.

著者プレーレ（1871-1946）は言語学者として知られた人物で大学で教鞭を取る。ブダペスト大学で最初に日本語講座を開設。戦間期の両国関係において中心的な一人として活躍した。書き下ろしではなく、雑誌の記事をまとめたもの。日本部分は約90頁。見出しを追うと、桜の花、ミカド、西郷隆盛、伊藤博文、豊臣秀吉、忠臣蔵、和歌、大和魂、劇『台風』。訪日経験もあり鋭い観察眼で日本を捉えている。

Bozóky Dezső: *Két év Keletázsiában. II. Japán.* 1911.

著者ボゾーキ（1871-1957）は墺洪軍の船医として二年間アジアで過ごした。その体験を元

に著された書籍で、第二巻が日本について。目次を追うと、まずは訪れた都市について、長崎、神戸、大阪、京都、横浜、東京、続いて忠臣蔵、日光、箱根、伊勢神宮、宮島、函館と続き、再び南下した鹿児島、別府で終わる。民俗的な事柄の観察、日本人とのエピソード、習慣の描写も詳しく正確で、読み物としても面白い。現代の旅行者のように写真を撮っていて、当時の日常、台所や湯浴みの場面がそのまま写されていて目を見張る。今は衰退した工芸の仕事場や人力車が並ぶ一方、不変の名所など貴重な写真によって明治世界が蘇る。

Csige Varga Antal: *Japán és a japánok*. 1914.

著者チゲ・ヴァルガ（1887-?）は、法律家であり、傍ら雑誌等で教育問題について寄稿していた。一時県の副知事も務めている。日本の専門家でははなかったが文献を元に優れた紹介の書籍を執筆した。訪日経験はなく諸国語の文献を駆使している。ラフカディオ・ハーンやケンペルなど知られた日本学者の書籍、ヴァイ伯の著書も含まれる。見出しを追うと歴史、言葉と文学、仏教の影響、芸術、教育、国民性、経済状況、外交という一般的なテーマが並ぶ。引用した情報源を明記してあるのも有用だ。当時ハンガリーで入手できた日本関係の書籍を知る上でも貴重である。質の良い多くの写真が掲載されていて名所から日常生活、美術品まで様々な分野を見ることができる。

Vay Péter: *A keleti féltekén*. 1918.

著者三冊目の日本に関する書籍。アジア地域への最後の旅の後に執筆され、全体はインドから東南アジア、日本と寄港地順に並ぶ。日本部分は後半の約 100 頁。訪問順に都市について書き、門司、下関、広島、神戸、大阪、奈良、名古屋、東京、日光、中禅寺、湯元、京都、高野山と続く。紀行文であり、見聞を元に以前の日本との変化を述べている。内容は吉野の花見、家族の生活、親の愛情、社会の構造、国の秩序、江戸時代の精神、世界観、美的感覚、社会のバランス、生活の楽しみ、近代化、国葬などとなっている。訪日も 3 度目となり、発展ぶりに目を見張りながら伝統が急速に無くなっていく様を惜しんでもいる。

Mécs Alajos: *Az ismeretlen Japán*. 1936. Javított második kiadás: 1942.

著者メーチ（1893-1978）は雑誌記者で 1934 年から二年間程特派員として滞在して執筆した。本書は雑誌の掲載記事をまとめたもの。章題は「永遠の日本」「勢力拡大する日本」「進撃する日本」「大胆不敵の日本」という挑発的な文言が目を引く。内容は、日本の伝統について、国民性や社会生活、子供達、家族制度、結婚、女性の役割、男女平等、芸者と続く。次章では開国と列強への道程、また国際的な情報戦も描く。最後の章はなぜ勢力拡大するのかを外交情勢や経済と合わせての分析。国際競争、労働状況、繊維工業の刷新などの項目が並ぶ。第四章は軍備、防衛を中心に新しい勢力圏のバランス、アジアの危険要素、死活問題、という小見出しでアジアにおける日本の勢力拡大を見据えた分析記事となっている。

Lajtha Edgár: *Japán. Tegnap, ma és holnap.* 1936.

著者ライタ（1910-?）はジャーナリストとして日本に滞在し、経験を元に本書を記した。当時 26 歳という若さだが、ハンガリー語の出版後、相次いで英、独、仏、伊、オランダ、デンマーク、スウェーデン、フィンランド各国語に訳されていて当時の国際的ベストセラーだったと思われる。日本語を解した訳ではないが、よく実情を掴んでいて格好の案内書を提供した。五つの章に分かれ「国土と人々」「芸術と文化について」「日本人の仕事のリズム」「アジアへの進出」「精神」という題がついている。32 枚の写真が掲載されていて、日常生活や芸術、仕事場など様々な場面を切り取っている。大豆を臼で挽いていたり、真珠の製作工程、警察学校の授業風景など、一般的な書物に載らないような写真が目を引く。

Zsigovits Béla: *Japán keresztény szemmel.*1937.

カトリック神父ジゴヴィッチ（生年不詳）による日本旅行記である。著者はキリスト教の情勢を視察すべく派遣されて、1935 年に二か月間滞在した。見出しを追うと、国の基本情報、地理と歴史に続き日本人の生活、服装、ホテル、住居、家庭生活、女性、結婚、自然との関係、スポーツ、芸術、国民性の後、富士山、日本三景、日光、阿蘇山、別府雲仙と訪問地の記述が続く。後半部分は専門領域にテーマを移し、日本人の宗教について、神道と仏教の共存、日常生活にどう反映しているか、聖職者達の環境等を記している。訪問先は東京から関西、長崎まで全国に及んだ。日本におけるキリスト教の歴史と現状を視察し、将来の展望を解説する。

Felvinczi Takács Zoltán: *Buddha útján a Távol-Keleten I-II.* 1938.

著者フェルヴィンツィ・タカーチ（1880-1964）はトランシルヴァニアの生まれ、美術史を専門とし、複数の大学で教鞭を取る。ホップ・フェレンツ東洋美術館を立ち上げ、専門家として知られた人物。訪日は三井高揚男爵が行った文化支援による招待旅行であった。1935 年 11 月から一年に渡ってアジアに滞在。日本についての記述は第 I 巻が訳 100 頁、第 II 巻が訳 60 頁ほどである。早春の日本という見出しで始まり、続いて着物、日本固有の世界、平安京、奈良、銀閣寺、花見酒、法隆寺、伊勢、東京、日本の新人類、鎌倉の大仏などが題 I 巻。題 II 巻は、驚きの発見、日光、芸者達、古い民家、正倉院、琵琶湖、日本との別れ等の見出しで記述される。旅のエッセイという趣が強く、滞在中の出来事を詳しく綴っている。特に日ハ関係に役割を果たした人たちとの交流が注目される。

Mezey István: *Az igazi Japán.* 1939.

著者のメゼイ（1895-?）は第一次大戦末期にシベリアで戦争捕虜となり、出兵していた日本軍の管轄下に置かれた。収容所で日本人と友好関係を結び、帰国後 1924 年にハンガリー日本協会を設立している。1938 年に派遣されて来日し体験を元に本書を執筆した。テーマを

貫いているのは、日本・ハンガリー関係であり、アジアでのハンガリー人の活動や様々なストーリーを集めている。「戦争に向かう日本の本当の顔」という章では国際政治や日本の立場、軍隊や女性を描く。後半は専ら両国間交流の行事や人物を中心に描き、時代の証人という役割をも果たしている。最初に日本に来たハンガリー人とされるベニョフスキーから始まり、自らが関わるハンガリー日本協会の活動までが網羅されている。全体はエッセイ的な書き方で、軽い読み物風となっている。

Keöpe Viktor: *Japán két arca.* 1943.

著者ケペ（1883-1970）は地質学者であり、訪日の目的は専門的な見地からの日本視察だったようだ。目次を追うと、新しい世界、国土、長崎、鹿児島、霧島山、神戸、大阪、歴史、京都、芸者世界、奈良と名古屋、宗教、横浜、東京、教育と芸術、日光と浅間山、最後に日本の国力がなぜここまでになったのか、という意見を書いて終わっている。記述は訪日体験に基づいている。専門が地質学であり山や土壌、地震など、他の書物にはないテーマが扱われ、その意味でユニークな書籍だ。霧島山の観察や、当時まだ噴煙を上げていた浅間山では実際に山に登りその様子を詳細に描き、活火山が緩やかな活動を続けている所へ実際に近づけるのは稀なことで、学者として貴重な体験をしたと記している。

Zsuffa Sándor: *Nippon.* 1943.

『ニッポンと極東の対立における歴史的背景』というのが書籍の正式なタイトルである。第二次世界大戦に突入していく時代を反映し、日中関係等を解説している。著者ジュッファ（生年不詳）はハンガリー軍の大佐であったが、第一次大戦末期に日本軍と接した経験がある。時の在ハンガリー日本大使館員出納功が挨拶文を寄せている。内容は七つの章立てで、中国についての記述の後、日本の歴史、言語、地理、宗教、芸術、日常生活、産業、武士道など多岐に渡るテーマがあり、文献を駆使して書いている。最後に日本・ハンガリー関係についても章が加えられ、30 年代後半の日ハ文化協定についても詳しく知ることが出来る。

Nihonjinron in Prewar Hungary: Analysis about books on Japan published at the end of the 19th century to World War II

Yuko UMEMURA

Abstract

It has been 30 years since the end of the Cold War, but Hungary, a Former Eastern Bloc Country, is still unfamiliar to most Japanese. By examining the history of Japanese-Hungarian relations, one can find that there was a surprisingly close exchange between the two countries before the War. Hungary was initially established through ethnic migration from the east, and the Hungarian people have a traditional affinity for and interest in Japan. This article will introduce and analyze a number of publications on Japan, ranging from the beginnings of bilateral relations at the end of the 19th century to World War II. In a time when travel was not yet easy between the two countries, one can find great number of interesting works in which one can discover a rich cultural heritage. And many of these works, which are almost unknown in Japan, can shed light on the nihonjinron (Japanese exceptionalism) as viewed by Hungarians. Who were the authors of these works and what kind of images of Japanese people did they portray? What topics were the authors interested in and with whom did they interact, and how did the contents of these works change over time?

Keywords：Hungarian-Japanese relationship, Austro-Hungarian Monarchy, Vay Peter, Turanism, cultural exchange